

6. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その34)】

エチゼンクラゲ出現

日本にはもともと生息しない世界最大級のエチゼンクラゲ来襲のニュースが、昨今、頻繁に話題にのぼる。漁業関係者は、その巨体が大量にかかると網のひき揚げに漁獲物の傷みに頭が痛いことがはなはだしい。大型中の大型クラゲ、エチゼンクラゲが我が国へ大量に来襲したのは、前世紀にはたった2回の記録しかない。今世紀には立て続けでやってきている。中国側の事情が近年急速に変わったことと対応しているようだ。エチゼンクラゲは、もともとは東シナ海や黄海などの中国生まれで、主に対馬海流に乗って秋に我が国の日本海沿岸にやってくる外来種である。

エチゼンクラゲの我が国の太平洋岸への出現

黒潮洗う我が国の太平洋岸へは1個体たりとも来ることはない。ただし、2002年、津軽海峡を抜けた後に親潮に乗って南下し、千葉県まで達したことがある。それほど丈夫なクラゲなのと、21世紀は毎年ではないものの連続した大量出現が起こっており、日本に定着する可能性もおおいにある。日本の沿岸は港湾がよく整備された結果、エチゼンクラゲが物理的に生息できる多数のポケットができ上がり、これらのポケットに河川が適量に流れ込み、エチゼンクラゲの故郷と同じ塩分濃度の薄い海が再現されるだろう。付着基盤もそろっており、変態したポリプの口にあう餌も無限にあるので、あとはエフィラをつくりだせる条件が整った水温が巡る場所であればよい。将来、淡水産のマミズクラゲに似たような出現がニュースにのぼるかもしれない。港によって雄や雌ばかりのエチゼンクラゲが大発生したり、飛び地繁殖したりすることもありうる。たった1個体のプラヌラ幼生が適正なポケットに潜りこめば、それから成長した1個体のポリプは無数の個体からなるクローンをつくりあげるからである。しかし、ふしぎなことに、本場の中国からはまだ1個体のポリプもみつかっておらず、2011年にやっとポリプから遊離してしばらくたったエフィラ幼生が報告されたくらいなので、あれほど大量にわくのくに生態的研究がいっこうに進んでいない。

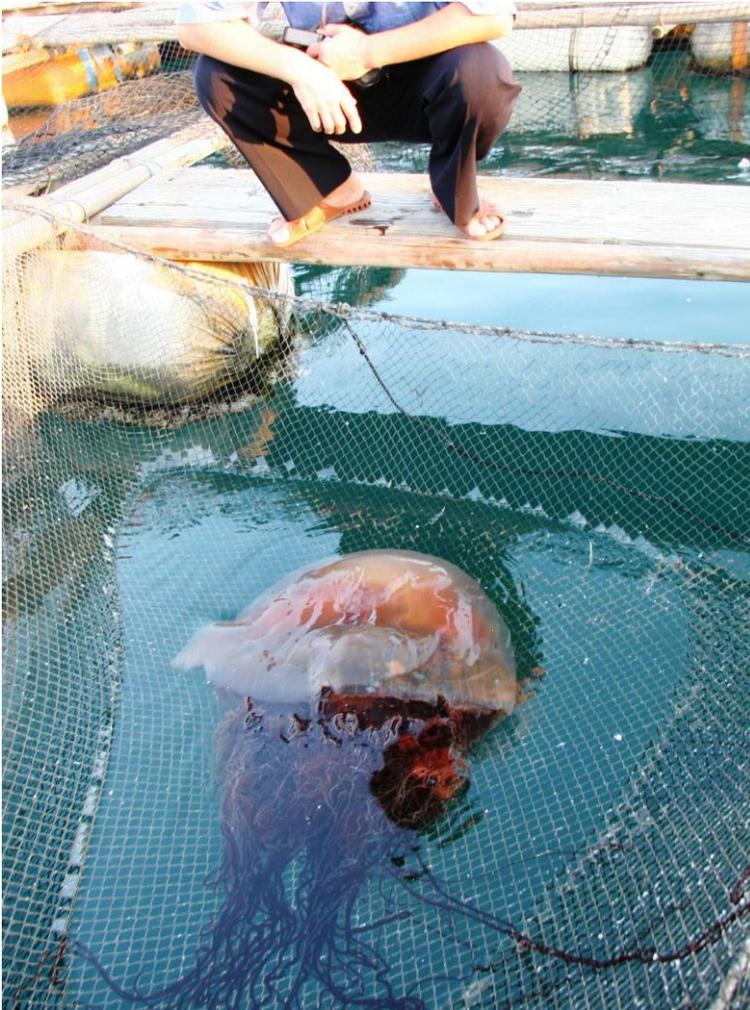
分身の術

エチゼンクラゲのポリプは分身の術を心得ている。自身から分身を多数つくるやり方である。分裂したり、足元から糸のようなストロンを出したりして、その先に個虫をつくりあげる方法である。しかも、環境が悪いと足元にたくさんのシストをつくって、何年も眠りに入ることができる。少なくとも5年ほど生存するのはなんともないとのことである。可能性があるもう一つのやり方は、プ

ラヌロイドという独特の分身で、その小さな丸い体を泳がせて、自身から遠くへばらまく方法。プラヌロイドはプラヌラ幼生のように、プランクトンなので、港から港へと分布を広げていこう。巨大クラゲは一筋縄ではいかない逞しさをもったクローン生物なのである。

和歌山県田辺湾にも初出現！

田辺湾産の刺胞動物と有櫛動物をあわせて、2003年の時点で少なくとも111属146種のクラゲ類が報告されている。100年もの長期にわたる調査努力の賜物だが、このリスト中にエチゼンクラゲは入っていない。ところが、2005年11月3日、田辺湾奥で1個体が地元の水産関係者により網で掬い上げられた。調べてみる



と、成熟雄であり、十分に繁殖可能な発育段階であった。

2005年、エチゼンクラゲが紀伊半島周辺海域へ初めて出現したのは8月7日で、県南部の串本町で1個体が出現した。8月10日以降には、傘の直径が1mほどの複数個体が、県北部で底曳き網にかかり、網の破損やブームを曲げるなどの漁具の損害と同時に、漁獲物を傷めるといった被害をもたらした。両地点の間にある田辺湾への出現はその2ヶ月余り後であった。その後は現在に至るまで出現が途絶えている。クラゲはプランクトンなので海流に乗れば、丈夫であれば、思わぬところへも到達できるのである。

図. 田辺湾で2005年11月に漂っていたエチゼンクラゲ

